

コーパスを用いた「多義」分析～接頭辞 *over-*を一例に～

鬼頭修

京都大学大学院人間・環境学研究科

kitou@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1.はじめに

意味論、特に、認知意味論において、語の「多義」は、主要な研究対象として様々な分析がなされてきた。(cf.Lakoff1987, Sweetser1990)それらの研究において、多義語の持つそれぞれの意味がどのように相互に関係し、ネットワーク構造を成しているのかということについて、もしくは、それらが時を経てどのように意味が拡張されていったのかを、メタファーをはじめとしたいくつかの理論装置を用いた説明がなされてきた。本研究では、そのような従来なされてきたように多義のネットワークを構築するのではなく、そのような語の多義が、文脈においてどのように実現されているのか、つまり言い換えるならば、多義という現象が生じる環境について、コーパスにおける意味情報から考察してみたい。

2. Case Study - 接頭辞 *over-*

2.1 *over-*の意味に関する理論的分析

ここでは、接頭辞である *over-*を一つのケーススタディとして分析を行ってみたい。接頭辞である *over-*には大別して、*above* や *across* といった空間関係を表すものと、「過剰」の意味を表すような、「程度」の意味の二種類があるとされている。(山田2001:231) 例えば、

a) She *overcame* the fear of flying.

b) He *overate*.

上記の文において、a)の *overlook* における *over-*

は、空間関係¹を表し、b) の *overeat* は、「食べ過ぎ」という程度の意味を表しているということである。確かに、この「空間的」意味と「程度」的意味という二つの意味を持つという点で、接頭辞 *over-*は、多義であると考えられる。しかし、この二つの意味をさらに、各形態素の持つ項構造の点から考察すると、両者の意味の違いについてさらに理解することができる。²

“X *over-V*Y.”というモデルを用いて考慮する。

「程度」、「空間」の *over-*に関する項構造は下記のようなになる。(X は主語、V は動詞、Y、Z は目的語を表す。)

i) 空間の意味の *over-*

X *over-V*Y. → **X V *over* Y.**
→ **X V Y *over*.**

ii) 程度の意味の *over-*

X *over-V*Y. → **X V Y *over* Z.**

つまり、ここで重要なことは、接頭辞 *over-*の目的語の位置が、「空間」と「程度」では、異なっているということである。「空間」の意味の場合は、動詞の目的語と、*over-*の目的語が同じ(Y)であるのに対して、「程度」の意味の場合は、動詞の目的語と

¹ もちろんここでの、「空間関係」とは、比喩的な意味での「空間関係」のことであり、Lakoff(1987)によれば、*overlook* が、「見落とす」という意味になるのは、視線(tr)が目的語にあたる事物(lm)の上空を通り過ぎていくからであると説明している。

² この点は、黒田航氏 (NICT) とのパーソナルコミュニケーションによる。

は異なり、*over-*の目的語は動詞の目的語(Y)とは異なる Z をとっているということになる。もう少し解りやすく言い換えるならば、「空間」の意味の場合は「X が Y を *over* の状態で V する」もしくは、「X が Y が *over* の状態になるように V する」という意味になるのに対して、「程度」の意味の場合は、「X が Y を Z を越えて (*over*) V する」という意味になる。「項」という点から見れば、上記の3つの場合全てにおいて、接頭辞 *over-*の要求する項の位置は全て異なる。この点を実例を通して、考えてみよう。まずは、**X V over Y** という形式。

c) Massive exodus overwhelmed the aid stuff.³

Massive Exodus	<i>over-</i>	whelmed	aid stuff.
Massive Exodus		V	(O)
S	<i>over-</i>		O
S	Adv	whelmed	O
S	R1	R2	aid stuff.

これを見て解るように、この場合 *over-*は、動詞の *whelm* と同様の主語と目的語をとっている。

それに対して、**X V Y over** という形式とは下記のような場合である。

d) The court overturned the previous ruling.

The court	<i>over-</i>	turned	the previous ruling.
The court		V	(O)

³ この表の見方は、最上段の黄色の欄が、文全体を示しており、ピンク色のセルが、文中の各要素（語／句もしくは形態素）を表しており、それぞれの行が、それぞれの要素が要求する項に関する情報が収められている。S は、主語、O は目的語、V は動詞、Adv は形容詞を表す。また、R とは、Relational の略記であり、動詞句もしくは前置詞句を表す。このように、*over-V* という語を *over-*と V という形態素のレベルに分割し、それぞれが要求する項を考慮するという手法は、Kuroda(2000)における、Appendix A: *Composition and Decomposition of Patterns* における、*undergo* の分析の手法にヒントを得たものである。

	<i>over-</i>		S
S	Adv	turned	O
S	R1	R2	the previous ruling.

この場合は、*over* の主語は、文全体の目的語となっていることに注目していただきたい⁴。実際に *over* するのは、判決であって、裁判所ではない。むしろ裁判所は、「判決が *over* するよう *turn* させる」という意味において、使役性を持つと考えることができる。このような *over-*の意味を持つ動詞には、*overthrow*, *overrule*, *override* といった動詞が含まれると考えられる。この(c),(d)二つの *over-*が「空間」の意味であるが、程度の意味(**X V Y over Z**)は次に示す通りである。

e) The flame overheats the gas.

The flame	<i>over-</i>	heats	the gas
The flame		V	(O)
S	<i>over- φ</i>		
S	Adv	heats	O
S	R1	R2	the gas

程度の意味の場合は、上記でも述べたので、詳述は必要ないが、ここでポイントなのは、*over* の目的語が *heat* の目的語と同じではないということである。*over-*の目的語となっている、「φ」は、言語的には実現されていないが、意味的には、「何らかの基準」を表していると考えられる。

上記の分析から、表面上は *over-V* という形をとっていても、実際、特定の動詞に *over-*が接辞化し、その動詞が、特定の文脈に入った際に、*over-*がどんな項をとるかという点で、いくつかの異なったパターンを示す、つまり多義的な振る舞いをするとい

⁴ またこの場合、*over-*の目的語は主語の再帰代名詞であるということを書いておく。

うことがわかる。言い換えれば、*over*-それ自体においては、意味的に常に未指定(underspecified)の状態であり、基体となる動詞や、文脈中の他の要素(主語、目的語)により脱曖昧化が行われるのではないかと考えられる。

2.2 コーパスにおける意味情報からどんなことがわかるか

2.1 までで、接頭辞 *over*-について、*over*-が要求する項という点から理論的考察を試みた。それでは、実際そのような *over*-の多義に、主語や目的語という文脈要素がどのように意味的に貢献しているのかを実際の言語資料を通して考えてみたい。今回用いるコーパスは、日英新聞記事対応付けデータ(JENAAD)⁵ から、*over*-V を含む文章を抽出し、ノイズ(ex. *overtly*)を取り除いた全 661 件に関して、分析を試みた。それぞれ *over*-V の前後文脈から、主語/目的語を書き出し、それらに手動で意味のタグを付与した。意味のタグに関しては、[+/- human], [+/- group]といった素性表記を用いた。

さて、上記の言語資料における意味情報からどんなことがわかるのだろうか。当然、資料自体が膨大である為に、紙面の都合上、包括的な分析結果をここに記述することは出来ないが、まず特定の *over*-V に、つく主語/目的語にはある種の意味的な傾向もしくは偏りが見られるということである。もちろん、コーパス自体の特性(この場合は「新聞」)も無視してはならないだろうが、そのような意味的な偏りが、*over*-V の要求する主語/目的語の意味特性と相関があると考えことは妥当であると思われる。例えば、*overturn* という動詞を例にとって考え

てみよう。*overturn* に関してみると、本コーパスにおいては全 26 件見つけられる。主語の意味的な傾向はある程度はっきりしていて、主語のカラムをオートフィルター⁶を通して概観すると、[+concrete, +vehicle]と[+group, +organized]といった素性が大多数を占めている。特に、[+group, +organized, +judicial]という素性が見られることから、「裁判所が判決を覆す」といった文脈が多い(12 件)ということが解る。ただし、この事実自体は、このコーパスが新聞であるということに起因する部分が大いと思われるので、*overturn* 自体の特性と考えるべきではない。むしろ、主語の主要な特性が[+group, +organized]であり、[+authority]を持つということが重要なのである。前節における分析で、*overturn* を用いたが、そこで *overturn* における *over*-の主語は、文の目的語であり、よって *overturn* の主語(つまり文の主語)には、目的語を *over* の状態にさせるような、なんらかの使役性が必要であると書いたが、その条件が、まさに主語の名詞句によって、実現されていることが、このコーパスは明らかにしているといえないだろうか。さらに、興味深い点として、前述したように、主語のもう一つの意味的傾向として、[+concrete, +vehicle]という意味的特性を持つ主語(全 5 件)に関して考えると、このような無生物主語に「使役性」があるとは考えられない。実際に例を見てみよう。

f) A tanker carrying 10 kiloliters acrylic acid *overturned* on the Tokyo-bound lane of the Tomei Expressway in Fuj. (コーパスより)

The tanker	<i>over</i> -	<i>turned</i> .
The tanker		V

⁵ このコーパスに関する詳しい情報に関しては、次のリンクを参照のこと。

<http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiyama/jea/index-ja.html>

⁶ 今回、本コーパスの分析にあたっては、Microsoft 社の表計算ソフト Excel を利用した。

S	over-	
S		turned.

表は、実際の文章を簡略化して書いたが、見て明らかのように、いわゆる非対格の形をとった文章であるということがわかる。つまり、主語の **the tanker** は元々は目的語の位置にあるものであり、この場合の真の動作主にあたるものは背景化されていると考えられるのである。そして、さらに興味深いことに、コーパスを見ていくと、そのような動作主にあたる主語が実現されている表現を見つけることができる。次の文章をみていただきたい。

g) At JR Aomori Station, two carriages of a four-carriage train that had been stationary on a siding were overturned by strong winds and high waves from Aomori Port. (コーパスより)

strong winds and high waves	over-	turned	two carriages of a four-carriage train
strong winds and high waves		V	(O)
	over-		S
S		turned	O
S	R1	R2	two carriages of a four-carriage train

表は便宜上、能動文に直して書いたが、二両の客車を転覆させた動作主である、「強風」と「高波」が実現されており、それゆえに *over-* の項のパターンも、d)と同じになっているということにお気づきだろうか。

このように、コーパス上の意味情報は、*over-* の多義がどのような環境で発現するのかということについて重要な示唆を与えてくれる。*over-* だけでなく、他の語や形態素の多義を考慮する際も、それが

実現されている文脈を考慮に入れることが常に必要であり、そのような分析においてコーパスの示す実際の意味の分布は、そのような文脈と多義の関係を考える上で重要である。

3.終わりに

本研究においては、多義ということを考えて上で、文脈を考慮することの重要性、およびそのような分析においてコーパス上の意味情報を利用することの有効性を示したつもりである。今回は紙面の都合上、コーパスに関する分析結果を十分に示すことが出来なかった、今後包括的な分析結果を示し、コーパスを利用した多義研究をさらに進めていきたい。

(参考文献)

- Cruse, D.A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University
- Kuroda, Kow (2000). *Foundations of Pattern Matching Analysis, A New Method Proposed for the Cognitively Realistic Description of Natural Language Syntax*. 未刊行博士論文. 人間・環境学研究科. 京都大学.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: the University of Chicago Press
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics – Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. 5th edition. United Kingdom: Cambridge University Press.
- 山田祥一 2001. 「接頭辞 *over-* の空間的用法と程度的意味に関する一考察」、『意味と形のインターフェイス』(上)、231-239, 東京: くろしお出版